

王子殿下の慕う人。

諦めるつもりが執着されています!?

# Characters

ハンナ

エレナの侍女。  
真面目でエレナの  
理解者。

リアンネ・  
ギャロット

辺境伯令嬢。  
強欲でプライドが高い。  
リチャードに  
想いを寄せるあまり……

デューク

ルイス公爵家の家令。  
他の使用人からの  
信用も厚い。

エレナ・ルイス

ルイス公爵家の令嬢。  
一途だが、自分に向けられる  
好意については鈍感で、  
思い込みの激しい一面も持つ。

リチャード・  
スタンレー

何でもそつなくなすが、  
エレナに対しては不器用。  
周囲には冷酷で、  
容赦ない判断を下す。

アーネスト・  
ヴォルデ

リチャードの従兄。  
正義感が強く、  
人情に篤い。

メイリン・  
クロフォード

誰でもすぐに仲良くなれる。  
病弱とされているが、  
実は……？

プロローグ 幼い頃は

絹糸のようにさらりとした金髪と春に彩りを添える萼のような紫水の瞳を持つ幼子が、タタタツと一生懸命走っている。そんな幼い少女が見つめる先には、一人の少年が大量の本を抱えて回廊を歩いていた。

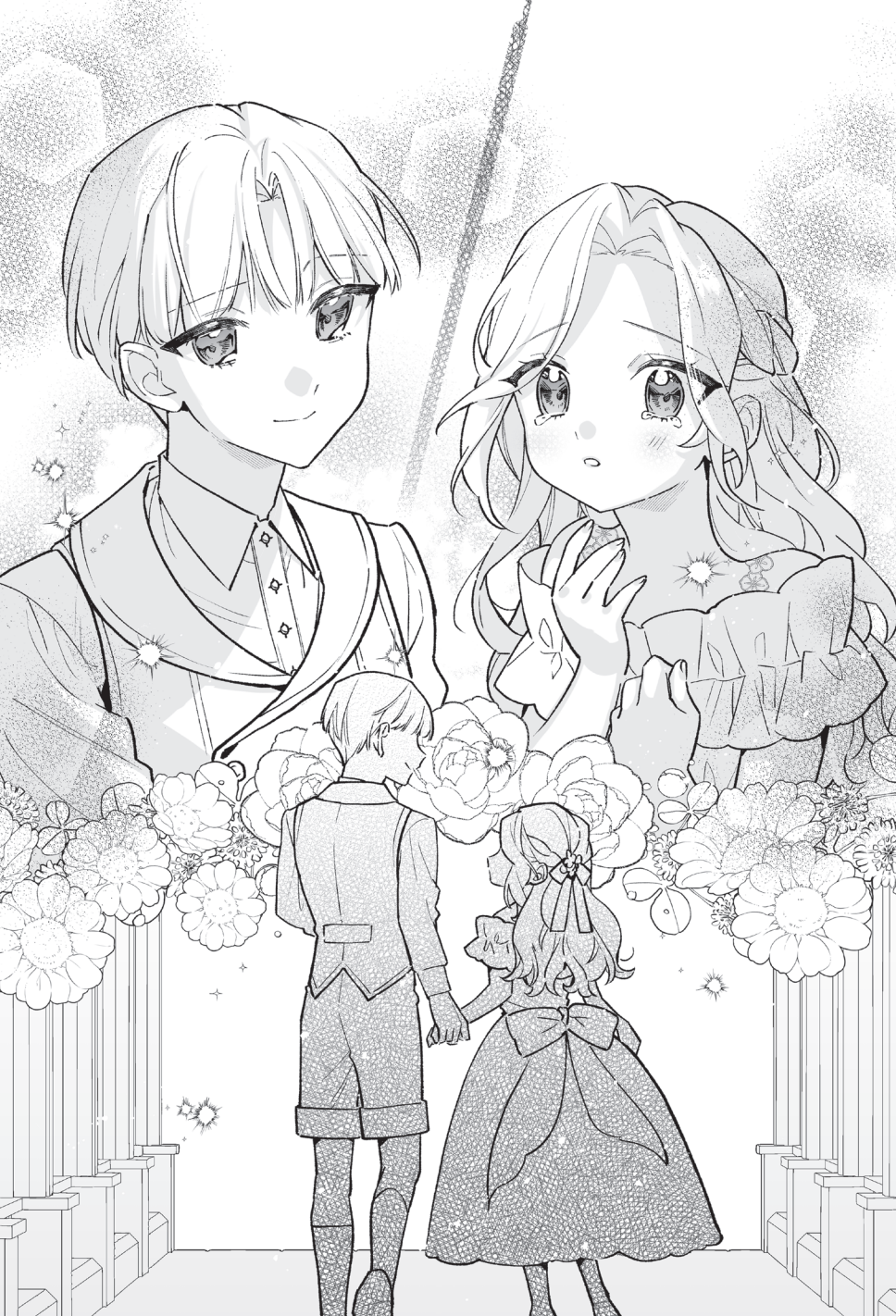
「リー！」

ようやく少年の元にたどり着いた少女は日向のような笑みを浮かべ、後ろから勢いよく抱きついた。対して、不意を突かれた少年は驚いて肩が上下し、抱えていた書物が大きな音を立てて地面に落ちる。

「うわっ本がっ………レーナ？ 後ろからいきなり抱きつくのは驚くからやめてって、あれほど強く言っただけだ」

地面に落ちた書物を拾いながら、少年は少女を問い詰める。

「だって、リーがいるのみつけたから、後ろからぎゅってしたかったの。それに驚かせることになにがいけないの？」



ぱちりと瞳が瞬いた。

舌っ足らずの口調で悪いことをしたと思ってない少女は、首を傾げている。

「レーナ、今回は書物だったから平気だけど、これがもし、とっても熱いティーポットだったら？」  
「え？」

「今みたいにティーポットを落としてしまったら、ポットは割れて熱い紅茶がその人にかかってしまう。そうして火傷を負って、一生残る痕になってしまったらレーナはどうするの？」

ティーポットを手で持ちながら回廊を歩く人はいないが、大事なものは驚かせてはいけない——ということだ。少年は優しい口調で諭すように少女に伝える。

「あ……と……？ それは痛い痛いなの？ レーナが転ぶよりも痛いなの？」

「そうだね。レーナが転ぶよりもずっと痛いし、転んだら痛いところが赤くなるだろう？ その赤いのがずっと残るんだ」

「……わたしそんなつもりじゃっ。だって、リーがいたからっ。リーが赤くなるのいやだよお」

何となく自分の行いが悪いことだと理解した少女は、目に涙を浮かべて今にも泣き出しそうだ。

「ごめん。僕が悪かった。怖がらせてしまったね」

ただ諭したかった少年は慌てて拾った書物を地面に置き、泣き出す寸前の少女を慰める。

「大丈夫だよ。僕は赤くなってるないし、次から気をつければいいんだ」

そうして少女が落ち着きを取り戻した頃合いを見計らって、少年はずっと気になっていたことを

尋ねる。

「……ところでレーナはどうしてここにいるの？ この回廊、普通の人は立ち入り禁止のはずなんだけど」

「んつとね。リーに会いに行きたいっていったら、こっちにいろよってへいかか」

屈託ない笑顔で少女は答える。

「父上か。警備上それはそれで問題なんだけど……。レーナ、公爵と一緒に来たんでしょ？ 送っていくから公爵の場所は分かるかい？」

「おとうさまはね、陛下のしつむしつ……？ つてところにいるって」

「……着いたら父上に小言を言おう」

「リー、何か言った？」

「何も言っていないよ。ほら、おいで」

一瞬眉を顰めた少年は、すぐに少女が転ばないよう手を差し出す。

差し出された手に少女は瞳を輝かせ、一回り小さな手で握り返し、楽しそうに少年に話しかける。

——そんな幼い二人の光景を、周りの大人達は微笑ましそうに見守っていた。

## 第一章 手放した初恋と王子の花嫁

あれから十年が経ち、幼い少女——つまり私、エレーナ・ルイスは淑女となっていた。

大陸の中でも屈指の国力を堅持し、近隣諸国から一目置かれるスタンレー王国。そんな国の中でも由緒正しいルイス公爵家の一人娘がこの私だ。しかしながら、十七歳となった今でも婚約者がいない。周りの友人達は既に結婚していたり婚約者がいたり取り残されつつある。

もちろん婚約の申し込みがないわけではなく、公爵家と縁を結びたい貴族からの求婚の申し込みが山のように届いている。

それなのに婚約者がいないのは、本当に結婚したいと思える相手が現れるまでは——と見守ってくれる両親の優しさに甘えて、延々と初恋を引きずっているからだ。

私の初恋の相手は、この国の王太子であるリチャード・スタンレー殿下。

金の髪と深い海を想わせる紺碧の瞳を併せ持つ、見目麗しい王子殿下だ。

彼も未だに正式な婚約者がいない。二十二歳になっても女性の影がない殿下には、友好国である隣国の王女の興入れや、もう既に意中の相手がいるが秘匿にされているなどと、社交界ではまことしやかに囁かれている。

最近では隣国ルルクレッツェの王女が王の名代としてこちらの式典に参列されたことから、その王女を迎え入れるのが有力視されていた。

かの王女はとても美しく聡明で、王子の隣に立つても引けを取らない凛とした姿だった——  
そんな風の噂が私の所まで届いているが、残念ながらご尊顔を拝見したことがないので、機会があればスタンレー滞在中にご挨拶に伺いたいと思っています。

小さい頃はお父様に必死にせがんで幾度も王宮に連れて行ってもらっていた。なぜそんなにせがんでいたのかと言うと、リチャード殿下に会いたかったのだ。

本来、公爵家だとしても王族とは滅多にお目にかかれない。だが、お父様はこの国の君主であるリドガルド陛下の側近だった。加えてお母様は王妃のミュリエル様とも仲が良く、私的なお茶会に招待されることも多々あり、そこでリチャード殿下と出会ったのだ。

幼少の私は「王子」という言葉がよく理解できなく、優しげな眼差しでこちらの話を聞いてくれる殿下が、今となつては烏澁おこがましいが兄のような存在だった。

ただただ会いたいという気持ちで押しかけのように王宮に通っていたのは、私の中で他の追隨を許さない一番大きな黒歴史だ。

何せ相手はこの国の王太子、暇な時間など無いに等しい。単なる公爵令嬢である私が何度も会いに行つていい相手ではないのだ。

それなのに私が来ると嫌な顔ひとつせず、いつも相手をしてくれていた殿下には感謝してもしきれない。  
そんな兄のようだと思つていた王子殿下が、自分の好きな人だと自覚したのは偶然だった。  
その日は前から会う約束をしていた日で、貴賓室きひんへと続く廊下を案内人と歩いていた時のこと。  
窓越しに見える庭園に、一人の可愛らしい少女と並んで歩いている殿下が目にと留まった。  
親しげに会話をしている二人を目で追いかけてしまう。ズキズキと左胸に痛みが走り、そつと胸に手を添える。その時に初めて私の中に芽生えていた恋心を自覚した。  
おかげでその後は殿下と話をしても、全て上の空になり心配されてしまった。  
私は帰りの馬車の中で考えた。  
いつも殿下は優しい。だからきつとこれからも、本物の兄のようにあの柔らかな眼差しをこちらに向けてくれるのだろう。  
でもそれはあくまで家族愛に似た感じなのだ。私を恋人や伴侶等の恋愛対象として、見てくれないのはよく分かつていた。

殿下は以前、自分の意見をきちんと聞いてくれる人——あわよくば愛する人を婚約者に迎えたいと話されていた。

——それでは私は？

殿下と会うといつも自分の話ばかりで、わがままを言って彼を困らせたこともある。もうこの時点で彼の希望通りの人物でない。おまけに向けられているのは家族愛だ。

「……私、無理では？」

私は初恋に気づいた時点で失恋を確信した。

とは言え、恋心と失恋を同時に自覚しても、恋情は簡単には消えてくれない。

だから十七歳になった今でも初恋をずるずると引きずり、送られてくる紹介書を突き返してしま  
うのだ。

そんな私は足が遠のいていた王宮を訪れていた。

お父様が珍しく大切な書類を忘れていき、それに気がついたお母様から持っていくように言われ  
たのだ。

王宮を訪れたらリチャード殿下に遭遇する可能性がある。ゆえに「ぜつつたい！ 行きたく！  
ない！ です！」と猛反発したのだが、お母様の無言の圧力に負け、渋々馬車に乗って王宮へと足  
を運んでいた。

誰にも遭遇せずに早く帰りたいと思いつつながら、早足でお父様の元へ急ぐ。

「えっと……お父様の仕事場はどこ辺だったかしら？」

きよろきよると辺りを見回すが、前回来た時から部屋の配置換えが行われているようで、どこに  
何の部署があるのか分からなくなっていた。

「……あっ！」

段差に躓いて、持っていた封筒から書類が飛び出し宙を舞う。

「どうしよう……ほんとにドジなんだから……」

散らばってしまった書類を集め、枚数を数える。床に落としてしまったことで少し汚れてしまっ  
たが、破れてはいないので読む分には支障はない……はずだ。

「レーナ、ここで何をしているの？」

「っ！」

突如回廊に響いた私の名に振り返ると、そこに居たのはリチャード殿下だった。

刹那、自分の感情と裏腹に大きく心臓が跳ねる。心に秘めて閉じ込めたはずの感情が、呆気なく  
外に溢れ出す。

「……お父様の忘れ物を届けに参りました」

大きく波打つ鼓動と、赤くなる頬がバレていないだろうか。普通に見えているだろうか。段々小  
さくなる己の声を聞きながら心配してしまう。

「公爵の所に行くのか。僕もちょうど彼に用事があるんだ。一緒に行こう」

「本当ですか!? 実はお父様の仕事場が分からなくて困ってしまって……」

これでお父様に忘れ物を届けることができるので、心の底から安堵する。

「道理で遠回りになるこの回廊にレーナがいるのか」

殿下がゆっくりと歩き出す。鼓動が速くなるのを抑えながらちらりと見ると、窓からの日差しし

よって金の髪が光り輝いている。けぶるような睫毛と碧眼を併せ持つ端正な顔立ちの殿下は、まるで絵本の中の王子様のようだ。まあ、真正正銘の王子殿下なのだけだ。

「王宮に来たのは久しぶりだったので道を忘れていて、殿下にお会いできて助かりました」  
軽く頭を下げると、殿下はいつものように優しい笑顔を浮かべる。

「それは良かった。久しぶりにレーナに会えて嬉しいよ。僕が忙しいのもあるが、君も小さい頃のように王宮を訪れないから全く会わなくなっちゃった」

「そうですね」

「昔はよく僕に会いに来てくれていたよね。ここ数年で来なくなっちゃったけれど、やはり忙しいの？」

「それは……」

予想外の問いに言葉が詰まる。王宮に来ることはあるが、まさか「貴方に遭遇するのが嫌だから極力控えている」とは言えまいし、かと言って、咄嗟に嘘がつけるほど私は器用ではない。

「……お父様は忘れ物をしませんし、殿下の婚約者ではない私が会いに行くのも……おかしな話ですから」

苦し紛れに答えれば心が軋む。

「ふーん。僕の婚約者ねえ」

「殿下はご成人されていますし、公表していませんだけで内々には決まっていますのでしょ？ それ

なのに婚約者でもない私が殿下に会いに行くのは、良くない噂が立ちます」

返答によっては傷つくことが分かっているのに、口からはスラスラと言葉が紡がれていく。

御年二十二歳の殿下に婚約者がいないのはおかしいと、誰だっと思っただろう。ましてや彼は王太子なのだ。花嫁を迎え入れない選択肢はありえなかった。

だからきつと、事情があつて公表できていないだけなのだ。

隣国ルルクレッツェの王女はまだ滞在しているらしいし、結局はそういうことなのだろう。

「……決まっている令嬢はいないよ」

クスリと笑いながら、殿下はまるで妹にするように私の頭を撫でた。上から降りてくる手に反射的に目を瞑る。

小さい頃から見てきたから分かる。彼は嘘をついていない。その事に安堵している自分がいて、我ながら未練がましいなど感じてしまう。

「だけど——」

「今なんと……？」

続けられた言葉に私は目を見開いた。

「慕っている令嬢はいるよ」

言葉はたちまち鋭利な刃物となって心に突き刺さった。

感情が、表情が、急降下した。

自分で失恋を確信した時の悲しみとは比べられないほど、グッサリと深く突き刺さる。私は馬鹿だ。阿呆だ。間抜けだ。やっぱり慕うご令嬢がいるのだ。一番近くで殿下のことを見してきたと思っていたけど、それは私の勘違いで彼にはもつと親しい——愛する人がいる。

それを知ってしまったって、信じたくなって、今にも泣き出したい衝動を必死に抑えつけて、笑みを貼り付ける。

この国の中で殿下と一番爵位と年齢が釣り合いそうな貴族令嬢は私だった。なぜなら、年齢近い令嬢達は既に婚約もしくは結婚していたからだ。

だからもしかしたら奇跡が起きて、彼の婚約者になれるのではないかと、この年にもなって微かに希望を抱いていた自分に気づき、恥ずかしくなる。

羞恥心と二度目の失恋に打ちひしがれ、表情を失いつつある私とは反対に、他の人には内緒だよと微笑む殿下の温度差が激しい。

(泣いてはいけない。笑って言葉を紡がないと……淑女教育で感情を隠すよう習った成果をここで発揮するのよ)

「もしやルルクレッツェのジェニファー王女でしょうか？ それとも他のご令嬢ですか？」  
純粹に、驚いているように、抱いている感情は表に出さないように少し空元気な声を出す。

「ジェニファー王女ではないよ。あの方は少し事情があつて通常よりも滞在はしているけど。それに、僕の気持ちは父上も母上も知っているから」

「陛下とミュリエル様もご存じでいらつしやるのに、その御方を殿下はずっとお待ちしていると？」  
驚きだ。そんなに鈍い令嬢がいるなんて。

「そうだね。ずっと気づいてもらえないから、いい加減直接アプローチしようかなって。僕も周りもそろそろ我慢の限界だから」

周りとは、きつと後継者問題を憂慮している小煩い大臣達のことだろう。そこまで言うのなら、慕う令嬢がリチャード殿下の気持ちに気づいたら、即婚約が発表される。

そうだったら……笑顔でおめでとございますと言えらるのだろうか。  
いや、多分言えない。だって今でさえ泣き出しそうなのだから。

書類を握る手に力がこもる。  
「レーナ！」

「あつ、お父様」

いつの間にか地面を見ていた顔を上げる。すると正面の扉が開き、出てきたお父様が慌てて駆け寄ってくる。

「もしかして書類を届けに来てくれたのかい？」

「はい。どうぞお父様」

すぐさま持っていた書類を渡す。

「ありがとう。これから会議なのだが、これがないと財務のログウエアを納得させるどころか、

逆に詰められるところだったよ……ところで殿下はなぜレーナと？」

「彼女が道に迷っていたようだから案内を。レーナ、一週間後の王宮の舞踏会は来るよね？」

「行きますが……」

舞踏会がどうしたのだろうか。殿下の発言で身も心も滅多刺しにされた今の私には、舞踏会のことを考える余裕はない。

そうは言っても、年に一回の王家主催の舞踏会だ。行かない理由はない。

「そうか。なら良かった」

「良かった……とは？」

キョトンと首を傾げれば、お父様に用事があるはずの殿下は「内緒」とだけ呟いて去ってしまった。



王宮からいつ帰宅したか覚えてないが、いつの間にかルイス邸の廊下を私は歩いていた。

自室へ続く廊下を、ふらふらと左右の壁に体をぶつけながら歩く。

「ひえっ！ おっお嬢様……!? 一体どうなされたのですか？ 王宮で何があったのですか？」

盛大に転びながら戻ってきた私に、部屋の掃除をしていた私付きの侍女ハンナが軽く悲鳴をあ

げた。

「ハンナ……居たのね」

私は床に打ちつけて真っ赤になった顔を、ボサボサになって見るに堪えない金髪と共にあげると、ハンナが駆け寄ってくる。

「部屋の掃除とドレスの整理をしようと思いましたが」

ハンナが顔にかかっていた髪を耳にかけてくれた。

「貴女にお願があるの」

「はい。なんでしょうか、お嬢様」

「掃除は明日にして、今日はこの部屋に誰も入れないで」

「かしこまりました」

ハンナは私の様子から察してくれてそのまま退出してくれた。

一人になった私は、床から起き上がって寝台に飛び込んだ。

「もう泣いていいわよね……うう……ひっく」

我慢していた涙が堰を切ったように瞳から流れ落ちていく。

「振られる覚悟で伝えておけばよかったのかしら……ひっく」

今更後悔しても、もう遅い。なのに諦めきれない気持ちが大きくなっていて、傷口が広がって

「私の意気地なし！ ふえっ……全部忘れられればいいのに」

手で拭いても拭いても流れ落ちる涙は止まらず、ぼたぼたとシーツに落ちては吸い取られていく。——この恋心も、後悔も、小さい頃からの殿下と過ごした想い出も。紙を燃やせば何も残らないように、全て消えてしまえばどれほど楽になれるだろうか。

全て忘れてしまいたい自分がある反面、忘れたくない、楽にならず、ずっと好きでいたいと思っ  
てしまう自分もいて、感情が縋ない交ぜだ。

ぐちゃぐちゃの感情に任せてクツシヨンに腕を振り下ろせば、縫い目が裂けて中に入っていた羽  
毛が辺りに舞う。

「エレナ、貴女は馬鹿よ。大バカものよ！」

何より殿下を幼い頃から追いかけていただけで何もしてこなかったのに、正面から失恋を突き付  
けられた途端、悲しんで泣いている自分自身が一番恨めしく、嫌いで、許せなかった。

◇ ◇ ◇

「お父様、いい縁談はありませんか？ 優しい方なら縁談を受けようと思うのですが」

家族団欒だんらんの夕食の席で、私は腫れぼったくなった目を擦りながらお父様に尋ねた。

数時間泣きながら考えたのだが、この年にもなって初恋を未練がましく追うのはもうやめよう。

追っていた結果がこれなのだから。

泣いていても何も始まらない。行動を起こさなければ自分が望む未来を掴つかめない。王宮の件でよ  
うやく身に染み込んだ。

それにいつまで両親に甘えるのか。このままでは親不孝者になってしまう。

「ああ、いつも通り縁談は断っておくよ………つてえっ!? レッ、レーナ!? どういう風の吹き  
回しだい？」

けたたましい音を立ててお父様のナイフが床に落ちる。

「そっそうですよ。姉上、熱でもあるのですか？」

「レーナちゃん、大丈夫？ 体調でも悪いの？」

弟のエルドレッドは慌てて風邪薬を探しに行こうとし、お母様に至っては私の額に手を当てて熱  
を測ろうとしている。

(………そんなにおかしなこと言ったかしら?)

「熱なんてありませんよ。体調も万全です」

目は泣きすぎて赤くなっているだろうが、それ以外はなんともない。

「頭をぶつけたかい？」

「いいえ」

「それではどうして急にそのようなことを」

「このままいくと私、ますます婚期を逃しますよね。そうなるとお父様とお母様、それにエルドレットにも迷惑がかかりますでしょう？ 家族に迷惑をかけるのは嫌なのです」

「私達のために、家門のために、結婚すると言うのならばしなくもいい。私達はレーナに幸せになってもらいたいんだ」

「ですから、幸せになるために優しい殿方と結婚したいのです」

これは本当。結婚するなら優しい人がいい。それに世間一般の令嬢の幸せとは、結婚して円満な家庭を築くことだ。

と言つても、既に適齢期を過ぎつつある私に選択の余地があるわけではないけれど。

家格にこだわるつもりはない。とにかく優しい殿方ならばどこへでも嫁ぐと決めた。

「とりあえず、今ある縁談を教えてください、お父様」

「いや、リチャード殿下はどうしたんだ？」

「リチャード殿下ですか？ なぜそこで殿下のお名前が？」

今度はお皿が割れる音がした。他にも執事が水差しを落とす、床一面水浸しだ。壁に控えていた給仕の者が慌てて床を拭いていく。

「……エルドレット、私が想像していた以上にレーナは鈍感らしい」

「父上、残念ながらそのようです。これほど鈍感な人を見たことはありません」

お父様とエルドレットは私を哀れな目で見てくる。

どうしてそんな顔をするのだろうか。訳が分からなくて戸惑ってしまう。

お母様も小声で話しかけてきた。

「つつきり貴女はリチャード殿下を慕っているのだと思っていたわ」

ぎゅっと心臓を鷲掴みされたようでとても痛い。小さい頃から殿下の名前を連呼し、事あるごとに会わせてくれたせがんでいたら、お母様もそう考えるだろう。

「昔はそうでしたが、今は違いますよ」

殿下には他にお慕いする方が存在する。今更想いを告げたところで迷惑になるだけ。まだ恋心を消し去ることはできないけれど、いつかは笑ってこの話をできる日が来ると信じている。

私は涙が枯れるほど泣いて、そうやって自分を納得させることにしたのだった。

だからこそ、お母様にも嘘を吐く。

「そう……なのね」

お母様はそれつきり口を閉ざし、今度はお父様が話し始める。

「私から縁談を押し付けることはしない。だが、レーナが自分から進んで結婚をしたいと言うのなら私は何も言わない」

「はい。ですので縁談を教えてください。選びますので」

「……分かった。後で部屋に届けさせるよ」

「ありがとうございます」

私がつこり微笑むと、両親は何かを言いかけて口を閉ざした。

湯浴みを終えて自室に戻れば、机の上に片手で持てないほどの手紙の束と、温かい紅茶が置かれていた。きつと紹介書を届けに来た執事が、夜はまだ冷えるからと気を利かせて持ってきてくれたのだろう。

「おいしい」

手紙を両手で抱えてソファに座りながら、紅茶を飲む。一息ついたところで一通目を開封した。

「これは誰かな……?」

封筒の裏にヴォルデ侯爵家と記載があった。

私にとって侯爵家からの縁談は破格だ。しかも年齢はリチャード殿下のひとつ上で嫡男という、誰もが羨むだろう相手である。

友人エリナの「もうヴォルデ侯爵家にしなさいよ！ 絶対これよ！ これ以上の待遇は存在しないわ！」と意気込む声が聞こえてきそうで、思わず口元が緩む。

「うーんこんな私でも、もらいたい物好きは大勢いるのね」

中身を見ては差出人を確認すること一時間ちよつと。ようやく全ての紹介書に目を通した私は立ち上がって背伸びした。

手元に届いた縁談は、貴族家に近い富豪の商家から最初に見た侯爵家まで幅が広がった。数にしてみれば五十は超えているだろうか。

ルイス公爵家という家柄が私の価値を高めてくれているみたいだ。

「直接会ってみないと本当に優しい人かどうか分からないわね。婚約した後に性格の悪さが発覚して婚約破棄！ とかになったら嫌だし」

もちろん相手との相性なんてお構いなしに家のために嫁ぐ政略結婚についても理解している。本来、貴族の結婚は自分の意思とは関係ないのだ。両親は私を駒として扱わずに、普通の、一人の、愛する娘として慈しみ育ててくれたけれど。

(……結婚するからには良い関係を築きたいもの)

私の友人達は家の利害と彼女達の恋心が一致して、幸せな婚姻関係を結んでる人が多い。

そんな友人達の幸福な光景を見ると、自分も多少は愛のある婚姻を……と願ってしまうことは許してほしい。

「今度の舞踏会で気になった方と話をしてみよう」

そこで良いなと思った殿方とは、また個別に話す機会を作ろう。ようやく考えが纏まった私は眠りについた。



数日後、私は友人達との茶会に参加していた。

「今日は来てくれてありがとう。全員参加してくれてとても嬉しいわ」

青々と生い茂る芝生の中央に位置する東屋で、主催者であるイヴォナを囲むように私を入れて五人の令嬢が座っていた。

「こちらこそ会えて嬉しいわ。これは全員からの出産祝いよ。よかつたら使って」

友人の一人、サリアが綺麗に包装された箱を手渡す。

「ここで開けてみてもいいかしら？」

私達が開けると、イヴォナは赤いリボンを解いた。

「わあ！ シャーロットの名前が入ったハンカチね！ 大事に使うわ。みんなありがとう」

飛び跳ねそうなくらい喜んでくれるイヴォナに、私も嬉しくなった。

そんな感じで和やかな時間が過ぎていき、久方ぶりのお茶会にいつにもまして他愛もない話に花が咲く。

サリアの子育て論に、新婚エリナの惚気話、社交界での噂話。それはもう様々だ。

そんな中、私の向かいに座っていたアレクサンドラが口を開いた。

「それにしてもイヴォナは出産、エリナは結婚して残っているのは私とレーナだけかあ」

「何を言っているのよ。貴女、再来月に式を挙げる予定でしょうに」

隣に座っていたサリアが、からかうようにアレクサンドラを肘で小突く。

「まだ招待状は送っていないけどみんな来てくれるよね？」

「ええ、絶対に行くわよ」

大きく頷くと、アレクサンドラはハッと何かを思い出したかのように目を輝かせた。

「ねえ、レーナ」

「なにかしら」

「レーナはいつになったら婚約するの？ ほら、ねえ？」

アレクサンドラの目配せに、他の三人も話に乗ってくる。

「そうよ、ずっと待っているのよ。まだ婚約もしてないけれど、挙式はきつと豪華でしょうね」

「私達待ちきれないわ」

なぜか祈る仕草をして惚けている四人。

みんなの考えていることが読み取れなくて、まるで私だけが蚊帳の外のようだ。

「えっと……婚約はするつもりよ。私もそろそろ結婚しないといけないから」

一昨日大泣きして決意したことを口に出せば、乙女達からキャー！ と黄色い悲鳴があがる。吃驚して思わず耳を塞いだ。

「なっ、何!? どうしてそんな騒ぐの？ 珍しいものではないし、皆もしているでしょう？」

混乱して立ち上がる私を、友人達は見ていない。

「よっ、ようやく……」

感極まるサリア。

「見てるこつちがハラハラしていたわ」  
ハンカチを取り出して目元を押さえるアレクサンドラ。

「わくおめでどう、レーナ」

「ぱちぱちと拍手しながら日向のような笑顔を向けるイヴォナ。

「おっそいわよー！ ねえ、いつ？ いつなの!? やっと結ばれたのね！」

私の肩を掴んでブンブンと振るエリナ。

「なっ、なんか……みんな……勘違い……してない？」

私はテーブルに手を付きながら息絶え絶えに言葉を発した。

「どういうこと？ だつてレーナが結婚するしたらお相手は一人だけだわ」

アレクサンドラの言葉に全員が頷く。

「どうして私の周りは……こども早とちりの人が多いのかしら……：：：：結婚するつもり、としか言っていないわ」

「だからするのでしょうか？」

私の言いたいことが分からないとばかりに、みんなの頭は横に傾く。

「だーかーらー！ 婚約する相手は決まってるの！ 今探しているの！」

痺れを切らした私が声を荒らげると、みんなは固まった。

「ちよっ、ちよーと待って、私にはレーナが言ったことが理解できなかったわ。もう一回お願い」

クエスチョンマークが頭に浮かんでいるのが分かり易すぎるアレクサンドラに対して、溜め息を吐いてしまう。

「婚約はするつもりだけど、相手は決まってるなくて、今探しているの」

「待って、理解できない」

パツと手を上げて口を開いたのは、またまたアレクサンドラだ。

「言いたいことは理解できるの。だけど、なぜその考えにたどり着いたのか理解できない」

「アレクサンドラの言う通りだわ。レーナには探さなくてもお相手がいるじゃない」

イヴォナがアレクサンドラに口添える。

「お相手なんてどこにもいないわよ。第一に私が親しい子息って幼馴染みのギルベルトや貴女達のお相手だけよ？」

みんなは目配せしている。

「それとも見ず知らずか、社交界で一言二言交わすぐらいの子息のことを言っているの？」

「リチャード殿下がいるじゃない」

声を潜めてサリアが言って、私は思いっきり顔を顰めてしまう。

小さい頃から親しいこの四人は、私が殿下に抱いている感情を言わなくても察しているはずなのに、なぜ傷を抉るようなことを言ってくるのか。

「どうしてみんな殿下を出すのよ……あの方は……他にお慕いするお方がいるそうよ」

殿下には他の人に言っではいけないと言われたが、長い付き合いの彼女達は信用できるので大丈夫だろう。

「え？ リチャード殿下がレーナに対して仰ったの？」

「言ったわ。慕う人がいるって直接聞いたもの」

「「あ〜〜」」

私以外の全員が脱力した。エリナなんて茹でダコのようにテーブルの上に腕を伸ばしているし、「どうしてよ！　なんでそうなるの！」とテーブルに向かって喚いている。

「レッ、レーナ、確認だけど、貴女はリチャード殿下の慕う人は誰だと思ってるの？」

「そんなの知らないわ……今滞在しているジェニファー王女ではないらしいけど……」

私の返答にエリナは頭を抱え、常にのほほんとしているイヴォナも困り顔だ。

「どうやら友人達は殿下の慕う人に見当が付いているらしい。」

私を置いてみんなは小声で話し始める。聞き取りにくいのが、「鈍感」だとか「頑張ってもらえない」だとか、途切れ途切れに漏れ聞こえてくる。

「——私を除け者にして何の話をしているの」

尋ねれば四人とも振り向いた。

「うん、レーナはそのままでもいいわよ。あちらがどうにかしてくるはずだから。というか焦っても構わないと見守ってるこちらも困るわ」

全く答えになっていない返答と共に、エリナが私の肩を優しく叩く。

「そうよ、レーナは婚約したいと思える殿方を探せばいいわ」

「私達はレーナの味方だから」

「あつ、ありが……どう？」

よく分からないまま感謝だけ伝え、話は夏の舞踏会に移り変わる。

「今年のデビュタントは人数が多いそうよ。中でも話題に上がるのはクロフォード伯爵家のメイリン様。とても美しい方らしいわ」

この手の情報通、サリアが最初に話し始める。

この国の社交界デビュは、夏に行われる王家主催の舞踏会と決まっている。そのため普段は社交界に顔を出さない貴族達も夏の舞踏会には参加し、貴族間の交流を深める場としての役割も果たしていた。

「それなら私も噂を聞いたわ。なんでもクロフォード伯爵夫妻は美しい容貌の上に病弱な我が子を案じて、邸から出さずに育てたそうよ」

うんうんと頷きながらアレクサンドラも嬉々として話す。

「それじゃあ公の場に出てくるのは初めてかしら？　一目見たいけれど行けなくて残念だわ」

イヴォナはまだ初子のシャーロットを産んで二か月だ。体力的にも、イヴォナを溺愛しているエガートン侯爵も、社交界に顔を出すのは許さないだろう。

「デビュタントが終われば他の所にも顔を出すようになるわよ。落ち着いたら侯爵と一緒に夜会に参加すればいいわ」

「そうするわ。どのような方だったのか後で教えてくれないかしら」

「ええ、いいわよ。任せておきなさい」

引き受けたサリアがバッチリ調べあげてイヴォナに教えるのが想像できた。

「ありがとう。みんなは楽しんできてね」

ふふっとたおやかにイヴォナが笑って、長い時間外にいるのは出産直後の身体にまだ障さまたるからと、お茶会はお開きになった。

公爵邸に戻り、自室に生けていた花の水を取り替えようと花瓶を持って廊下に出た時のこと。

ハンナが嬉々として残酷なことを私に告げてきた。

「お嬢様！ ようやくリチャード殿下が舞踏会で花嫁を選ぶそうですよ！」

その言葉に、反射的に耳を塞いでしまった。

持っていた花瓶が床に落ちて砕け散る。ふらりとよろけた拍子に破片を踏んでしまい、足の裏から生温かい液体が流れていく。

「だれか！ 誰か来てっ！ お嬢様がっ！」

私が痛みに声を上げるのではなくて、ハンナが悲鳴をあげて屋敷中の者が集まってきた。それで

も私はその場から動けなかった。

周りには血溜まりができて、カーペットが赤黒く染まっていく。

飛び交う指示に、掴まれる手に、痛みがあるはずなのに何も感じない足。

「おっ、お嬢様……ごめんなさい……私が噂を話したせいで！ 痛いですよ。ああ、私が代わってあげられればいいのに」

包帯を巻いた痛々しい足も、自分の血を吸って赤くなっていく布も、現実味がない。でも今にも命をもって償いそうな彼女がただ可哀想で、消えてしまいうので、私はようやく一言絞り出した。

「貴女のせいではないわ。そんなに自分のことを責めないで。痛くもないから平気よ」

けれどもハンナはその言葉を聞いた途端、泣き崩れた。ごめんなさいとひたすら謝る。彼女からしたら、私が心配しているようで責めているように見えたのかもしれない。

でも本当に、足だけは痛みを感じていなかったのだ。

痛かったのは心で、諦めて、捨てて、違う道という名の婚約者を探そうとしていた舞踏会で、よりによってなぜその場までと。

そして納得した。ああリチャード殿下の言っていた「良かった」という言葉はこれを指していたのかと。たったそれだけで噂は私の中で真実となって心に刺さる。

ずっと彼を追い続けて来た私に、噂を聞いた際に心の準備ができるようにと思って事前に教えてくれたのだろうか？

なぜ良かったなどと言ったのだろうか。

私にとっては事前に教えてくれた嬉しさよりも、悲しさの方が勝るのに。  
ソファに座りながら足を上下に動かせば、包帯が緩んで傷ついた皮膚が見える。ちよんつと触つてみてもやっぱり痛みは感じない。だけど指先は赤くなって血の匂いがする。

(馬鹿だなあ、私……)

前を向くと決めたのにくよくよと何日も。いつまでも。めんどくさい人間だと思ふ。もう涙は出てこないけれど、悲しいという感情が私の中で溜まっていた。

両親は怪我を理由に舞踏会を欠席しなさいと言うだろうけれど、絶対に行くつもりだ。

リチャード殿下の花嫁を見れば、この諦めの悪い恋心を今度こそ捨てられる気がするから。



いよいよ舞踏会は今晚に迫っていた。

今日の邸宅は、朝早くからルイス家に仕えている侍女達が忙しく廊下を行き来していて慌たらしい。ふうと息を吐いて鏡を見れば、支度はほとんど終わっていた。

頭から足の先まで飾り付けられた自分は本当に綺麗だった。

「お綺麗ですよ」

支度を手伝ってくれた侍女達が褒めたたえてくれるので、微笑を浮かべて感謝を伝える。

しかしながら私の頭を占めるのは婚約者候補の情報と憂鬱さ。いつもみたいな高揚した気持ちは片隅にも残っていない。

「お嬢様、エントランスホールでエルドレッドお坊っちゃまがお待ちです」

扉から侍女が顔を出して私を呼ぶ。今日のエスコートは弟のエルドレッドだった。

ドレスの裾を踏んで転ばないように慎重に足を運び、階段を下り、差し出されたエルドレッドの手を取った。

「姉上、大丈夫ですか」

「どうして……？ 体調が悪いように見える？」

目の下のクマは化粧で隠してもらったが……。エルドレッドに見抜かれてしまうほど酷い顔をしているのだろうか。

「姉上は怪我をしています。舞踏会は欠席した方が——」

(ああ、怪我のことね)

「大丈夫よ。行きましよう」

そうして家族と共に馬車に乗って王宮に向かう。到着して最初に国王夫妻に拝謁する。

「リドガルド陛下とミュリエル王妃殿下にご挨拶を申し上げます」

お父様の挨拶に合わせて頭を下げつつ、私は鈍い痛みと大きくなる鼓動を必死に抑えつけていた。

(もし、リチャード殿下と視線が合ったら……耐えられなくて逃げ出してしまおう)

そんな考えは杞憂に終わった。リチャード殿下は席を外していたのだ。

顔を上げてくれ。君に頭を下げられるのは奇妙な感じだ。いつも私を叱ってくるからな」

はははと快活な笑い声を陛下は上げる。殿下と同じ紺碧の瞳にサラサラな金糸の髪は、シャンデリアの光によって輝いていた。

「……家族の前でそのような話をするのはおやめください」

「分かったよ。私が悪かったから睨まないでくれ」

お父様はそのまま陛下と話し始める。

「ヴィオは元気だった？ 久しぶりに会えて嬉しいわ」

次に私の耳に届いたのは、甘く潤った心地いい声だ。

大きなルビーの瞳に、緩やかなウェーブを描く淡い瑠璃色の髪。口元は少し弧を描いて、口紅が塗られた唇は優艶さを醸し出す。国一番の美人と称され、名実共に女性の頂点に君臨するお方。

この国の王妃ミュリエル様だ。

「エル、とても元気よ。私もあなたに会えて嬉しいわ」

椅子から立ち上がったミュリエル様はお母様を抱きしめる。お母様とミュリエル様は元々友人なのだ。ちなみにヴィオとは、お母様の名前であるヴィオレッタの愛称だ。

「レーナちゃんもお久しぶりね！」

「お久しぶりでございます」

ミュリエル様は私のことをよく気にかけてくれた。

お母様に連れられて王宮を訪れていた幼少期は訪れる度に可愛いと褒めてくれたし、お菓子を準備して待っていてくれた。最近ではミュリエル様主催の茶会に招待していただく度、「会えて嬉しいわ。さあ近くに来て」と隣に座るよう仰ってくださいさる。

お父様は陛下の側近、お母様はミュリエル様の友人、娘の私も王家の方々からの覚えがめでたい。そんな感じなので、妬んでくる貴族もいて肩身の狭い思いをしたことも多々あった。

とはいえ、我が家が筆頭公爵家の時点で他の貴族からの嫉妬は日常茶飯事。最近では慣れたし、一々気にしてられない。

「レーナちゃん」

「はい。なんでしょうか、ミュリエル様」

透き通ったルビーの瞳はキラキラと輝いて、ミュリエル様は声を潜める。

「あのね、レーナちゃん王家にお嫁に来ない？」

息ができなくなる。無理に空気を吸おうとすればヒュッと変な音が出た。

——花嫁を選ぶための舞踏会。

私の中でその噂は真実となっていたが、ミュリエル様の口から出たことで真実が増す。

私以外の令嬢を選ぶ場所で、放たれた言葉はまるで自分を嘲笑うかのようで——

この一週間、周りの人達は私にとって残酷なことを言ってくる。悪意がないのは分かる。分かるのだが、それでも黒い感情は湧き出てきてしまう。燻くすってしまおう。

どうして？ なぜ言ってくるの？ 話してくるの？ これまで何も言っていなかったのに！ なぜ今更——と。

ましてやミュリエル様は殿下の想い人をご存じでいらっしやるはずなのに。

「御冗談を。からかうのはおやめくださいませ」

気がつけば、内心とは裏腹にするりと言葉が出ていた。

「冗談ではないの。私達は貴女ならとっても嬉しいわ」

「わ……たし……は……無理です」

「どうして？」

「近々、今まで頂いた中から婚約を結ぶつもりなので」

歪こじな音を立てながら心臓は動く。決意は煙のようにかき消えそうだ。

汗ばむ両手を握りながら俯けば、淡い空色の生地が目につく。綿菓子のように甘くて澄んだ色。

可憐で上品に仕立てられたこのドレスは、殿下の視線を少しでも長く独り占めしたくて、半年も前から準備していたものだった。

「それはめでたい！ 結婚式にはぜひ招待してくれ」

普通であれば喜ぶ報告だから陛下もそう思ったのだろう。祝福の言葉をくれるが、状況が状況

だった。周りが固まっているのに一人だけ喜んでいるのだ。完全に場が白けている。

「……何も状況を把握できていない貴方は黙ってくださいまし！ 空気が読めない馬鹿！」

ミュリエル様の手にあつた扇が、陛下の頭に直撃する。

見ているこちらが痛みを感じそうなほど、ゴンツと大きな音がして陛下は小さく呻うないた。

「——ということですので、先日お話しいただきました件については辞退させていただきますね」  
呻く陛下を放置してお母様はにっこり微笑んでいる。顔は柔らかなのに寒気がしてくるほど怖い。

(……お話しいただいた件？)

首を傾げてしまう。王家からの重要な話は聞いてない。一体どのような案件を辞退すると言っているのだろう。

「そんな……ずっと楽しみにしてた愛でる計画……いやよ……ヴィオ……私の……」

左右にふらつきながらお母様に近寄るミュリエル様は青ざめている。

「何か誤解があるのでしよう。それが解けない限り、私達は承諾いたしかねます。そうでなければ娘は幸せになれませんもの」

真剣な顔でお母様は言い切った。どうやら私関連のことらしいが、本人を置いて話を進めないでほしい。

「………分かったわ。理由くらい本人に尋ねてもいいわよね？」

お母様は頷く。

「レーナちゃんは どうして嫌なの？ もしかしてリチャードが貴女に酷いことをした？」  
「どうやら私が王家に嫁ぐことらしい。そうでなければ殿下の名前がここで出てくるはずがない。  
「いいえ！ そのようなことはありません……！ 私からすれば身に余る光栄ですが……」  
大きくかぶりを振る。嫌じゃない。そんな感情を抱くはずがない。

『——慕う令嬢はいるよ』

脳裏に焼き付いて忘れられない言葉。あの日から心が事実を追いつかないまま日々は過ぎていく。  
涙が溢れてきそうグイッと目元を拭う。

「——私では駄目なのです。リチャード殿下には小さい頃から優しくしていただきました。助けて  
もいただきました。とても素晴らしい殿方です。気がつかないただけです……」

——お慕い申しました。

音にはならず、空気に溶けていく。

どこで貴族が聞き耳を立てているか分からないこの場所での「王家にお嫁に来ない？」という  
ミュリエル様の発言だ。きつと冗談ではない。

了承すればリチャード殿下の花嫁になれるのだろう。手順は簡単だ。「はい」と頷けばいい。  
でも、できないと思った。思ってしまったのだ。

私が望むのはリチャード殿下の愛する人になることで、王太子妃の地位ではない。  
まやかしの居場所をもらっても意味はない。今よりもっとずっと辛くなるだけなのだ。

「そう、何となく状況は理解できた。とりあえず私は息子をひっぱたきたい。何をしていたんだと  
責めたいわ」

「あの……ミュリエル様のお言葉が聞き取れなくて……なんと仰いました？」

おそるおそる尋ねれば、ミュリエル様は何も無かったかのように優しく微笑んだ。

「なんでもないわ。話してくれてありがとう。長々と引き留めてしまって申し訳ないわね。舞踏会  
が始まるから会場に行きなさい」

そうして扉の前までミュリエル様に押される。

「今宵の貴女に素晴らしい出逢いがあるよう願っているわ。もしかしたら妨害が入るかもしれない  
けど……嫌だったら無視してくれて構わないから」

「……ありがとうございます？」

よく分からないがとりあえず感謝しておこう。

「でも、もし、もしもよ？ 私は貴女に来てほしいから、気が変わってくれたらとても嬉しい。そ  
れに多分すれ違ってる……」

扉が閉められる寸前に言われた言葉は、私の耳にこびりついた。

弟のエルドレッドは、ファーストダンスを踊りに行った。

これで婚約者を選びに行けると思ったのもつかの間、私はまた違う人物から逃げていた。

こちらに近づいてくるその人物を避けるように、人をかき分けて端の方へ寄る。

この日のために磨き上げられた床を滑るように動く度、後ろの方のスカートのスカートの光がふわりと軽やかに舞い上がっては落ちていく。耳につけたイヤリングは室内を照らすシャンデリアの光を反射し、煌めいていた。

ファーストダンスは踊るつもりがなかった。必要に迫られた際はエルドレッドと踊るつもりだったが、その必要もないと思つた。今日ここに来たのは貴族として参加する義務と婚約者探しをするため、踊りに来たのではないから。

なのになぜ――

私を追いかける者の進路を邪魔しないよう、貴族達の道を開ける音がして逃げられないと悟つた。だから立ち止まって振り向き、追いかけてくる者に相對した。

会場内の注目を一手に引き受ける。

(どうして？ リチャード殿下には慕う相手がいるはずで、今日は花嫁が最初にダンスに誘われるはずじゃないの？)

一歩ずつ着実に歩みを進めるリチャード殿下との距離が詰まっていく。すると自分の意思に反してほんのりと温かいものが私の中に生まれそうになった。

「私に、貴女の今宵のファーストダンスの相手という喜びを頂けませんか」

片膝について、右手を差し出して、殿下は私を誘つた。

息を呑む周りの貴族達の視線を一身に集めつつ、大好きな殿下の誘いに温かい何かは急速に冷めていった。

デビュタントのファーストダンスは特別な意味を持つが、彼らが踊つた後の最初のダンスも、婚約者がいない貴族の中では特別な意味を持つ。

だから兄弟がいる場合は兄弟と、いない場合は親しい者、もしくは慕っている者と踊るのが普通で、殿下がそれを知らないはずがない。

今まで令嬢に乞われて殿下がファーストダンスを踊ることはあった。しかし、自分から申し込むことはなかったはずだ。それなのに今、彼は私に申し込んでいる。紺碧の瞳は私だけを捉えている。

――花嫁を選ぶと噂されていた王子殿下。

最初のダンスを誰と踊るか。今日一番注目されている事柄だろう。

だから驚いてしまう。なぜ、自分の元に殿下は来ているのだろうか。

頭は今起きたことをどうにか処理しようと回転する。

(殿下には慕う方がいて、それは自分ではなくて、じゃあ今の誘いは一体？)

――王子殿下の慕う人。

すなわち花嫁は、今ここで最初のダンスを殿下から申し込むことができない令嬢。だから秘密を知っている私に申し込んだのかと、己の頭は勝手に処理した。

語弊があるかもしれないが、簡潔に言えば当て馬で、冷めてしまうのも致し方ないだろう。

そう思っても相手はこの国の王子殿下。ダンスの誘いを私が拒否するわけにもいかない。(初めて、初めて誘っていただけなのに……なんで)

じわりと視界がぼやけそうになる中、過去のことを思い返す。殿下と踊ったのは初めてではない。過去に一度だけあったのだ。

それも私から誘ったのだが、ヘマをして結局殿下に助けてもらったような感じで。

それは自分がデビュタントだった十三歳の時のこと。

あの日はデビュタントと花嫁だけが着ることを許される純白のドレスに身を包んでいた。

初めて行く舞踏会に、指を折って日程を数えるくらい楽しみにしていた。

王宮に向かう馬車の中では「まだ？ まだつかないの？ 早く行きたい！」と瞳を輝かせながら

王宮を見つめ、両親から微笑まじげに見られる始末。

着いたら着いたで、はしやぎすぎでお母様に窘められ、謁見の間にいる両陛下に挨拶に行く。

『あら！ 今宵はレーナちゃんもデビュタントなのね！ おめでとう！』

『ありがとうございます。ミュリエルさま』

ミュリエル様に抱きしめられ、ご機嫌な私にこにこしている中、コンコンコンとノックをして入ってきたのは当時十八歳のリチャード殿下だった。



両親がデビュタント達の挨拶を受けている部屋になぜ呼ばれたのか把握していないリチャードは、「今挨拶に来てるデビュタントは誰だと思っ？」とミュリエルに問われ、躊躇する。

ルイス公爵夫妻がいる時点で答えが出てるようなものだが、リチャードはミュリエルの背後に隠れ、少しだけ見えているドレスの裾に魅入る。

(レーナだ)

答えはもう出ていた。

その子はリチャードの中で大切な、ずっと守りたいガラス細工のように、少しの力でもヒビが入って割れてしまう、少し手を加えただけで曇ってしまう、そんな儚くて綺麗な美しい存在だ。

(そうか。今日がデビュタントなのか)

『レーナですか？』

口に出せば胸が高鳴るのを感じた。

春の柔らかな日差しのようにリチャードの心を溶かしてくる。王子ではなく、一人の人間としてそばにいられる彼女だ。その子がミュリエルの後ろに隠れている。

目を凝らせば天鵝絨のような黄金のひと房がひよっこり出ていた。それが可愛くて口元が緩む。

社交界に入る年齢は人によって違う。一番早くて十二歳。遅くて二十歳。

これらは個々の事情によるもので、どの家の者がいつ社交界入り——デビュタントを迎えるの

かは分からない。

リチャードが社交界入りしたのは十二歳の時だった。王族で、将来この国を担う王太子。デビュタントは令嬢の方が注目されるが、その年は王子のデビュタントということで、リチャードが一番注目されていた。

ファーストダンスの際も、私を選んでくださいと年齢関係なく令嬢達が押しかけてくる。仕方なく、一番政治的にしがらみのない家門の令嬢の手を取って踊った。振りほども絡みついてくる腕に、纏わり付く視線。リチャードの気を引こうと、思わず顔を顰めてしまうほどの甘ったるい香水の匂い。

リチャードは最初の舞踏会で社交界に厭悪を抱いた。

けれども自分は王子で、誰に対しても平等に接して極力衝突は避けなければならない。それが己の基盤を作り、これからの国の行く末にも関係してくる。

嘔吐えづきたくなるのを抑え、リチャードは王子という仮面を被った。道化師になった。

(ああ、相手がレーナだったらとても楽しいだろうに)

名前だけしか知らないような令嬢と踊りながら、何度そう思ったかは分からない。

エレーナは自分よりも五歳年下で、最低でもあと五年は社交界に顔を出さない。しかも五年経ったからと言って、十二歳で社交界入りするとも限らない。

永遠の歲月のように感じてリチャードは嘆くが、彼女が社交界入りすることに複雑な心境も持ち

合わせていた。

初めて会った時からリチャードの心を掴んで離さない少女は、まだあどけなさは残るけれど、将来への片鱗を見せつつある。

何も汚いものを知らないような天真爛漫な笑みに、無条件で信じて握ってくる温かな小さい手。

「リー！」と呼ぶ金糸雀のような心地いい高い声と、上目遣いに見上げてくる愛らしさ。

そしてリチャードの心情も知らないで無邪気に抱きついてくる。

——全てが愛しくて、眩くて、儂くて、守りたいもの。

リチャードの中で一番大切な、壊されたくない、他の者に邪魔されたくない存在がエレーナだった。だからこれまで真綿で包むように大事にしていた。

嫉妬を浮かべて睨む令嬢も、怪訝で不愉快そうな貴族も、王宮を訪れるエレーナから隠し、自分の前にはおぞましいものが存在しないようにした。

そうして政治に携わる大人達から冷酷無慈悲と言われ始めていた自分を隠して、溫柔な兄のように振る舞った。

幸い彼女は気づかなかった。「リーはおにいさまみたいね」と言ってきたくらいだ。まあそのように彼女の瞳に映るよう動いていたのはリチャードなのだ。

そんなリチャードの心を翻弄する彼女が社交界に入ったら——きっと息達は目の色を変えて彼女の元に行くだろう。さながら光に群がる蛾がのように。

今でさえ可愛らしい顔立ちで、両親と自分を虜よこにしているエレーナだ。  
絶対そうなるに決まっている。

あの日向のような微笑みが、仕草が、愛嬌が、他の人に向くかもしれない。  
そう考えるとエレーナには見せられないような類いのどろどろとした感情が生まれる。

晴れ姿を見てみたい反面、彼女の良さは自分だけが知っていればいい、他の者に知られたくない  
という執着に似たものが、社交界に入った十二歳の時点でリチャードの中に存在していた。

ただ、純粹無垢な彼女はデビュタントが楽しみなようだった。

だからリチャードは彼女の想像を壊さぬよう、嘘を吐いて、塗り固めて、素晴らしい場所だと伝  
えた。

しかしリチャードにとって社交界は酷く憂鬱でつまらない場所だった。気を抜けばすぐに表情に  
出て、両親に注意されるくらいには。

毎度群がってくる人間が嫌で欠席したいが、自分の地位がそれを許してはくれない。逃げるこ  
とも許されない。王子という肩書きはまるで足枷あしづなのようだった。

夜会に参加するにつれて、愛想笑いをしていれば相手方が良いように解釈してくれるのを理解し  
た。なので薄っぺらい笑顔を貼り付けるようになった。

『リチャード殿下……あの……わたくしとも踊って……』

目だけは笑っていないリチャードに声をかけてきたのは、こここのところ力をつけてきている辺境

伯の娘。確かりリアンネという名前のはずだ。

誰とも踊りたくなかったが、辺境伯とは友好な関係を築きたいリチャードは踊りたくないだろう。

奥の方でこちらを窺っている人物に気がついてないふりをして、内心溜め息を吐きながら、リ  
アンネの右手を取る。

それだけでリリアンネは熟れた林檎りんごのように頬を赤らめる。

(期待したところで何も起こらないのに。無意味なことをする)

目の前の王子が毒を吐いているなんてリリアンネは思ってもいないだろう。

意識をダンスに向けなくても、染み付いた感覚が勝手に体を動かす。軽やかにステップを踏んで  
リードする。

『リチャード殿下、ありがとうございます』

気がつけば一曲終わっていた。自分も形式上の挨拶を口にして場を離れる。

『殿下、もう少し抑えてください……』

『これでも抑えているつもりだけどこ？』

先程居た地点に戻ってくれば、ハラハラしながら成り行きを見守っていた側近のギルベルトが小  
言を言う。

『いつも近くにいる私からしたら怖いんですよ……！ 目が笑ってません……』

どうやら相当冷やかかだったようだ。きっと周りの貴族達は気がついていないだろうけれど、普

## 立ち読みサンプル はここまで

段からリチャードのそばにいるギルベルトからしたら堪えるらしい。  
(今夜もつまらないな)

『ギルベルト』

機嫌の悪さが声に出てしまい、雪よりも冷たい声音こゑねになってしまった。

『……何でしょうか』

『抜けていいか？』

『駄目です。駄目に決まっています。あつ、ちよつ、待つ！ まつ、まだ始まったばかりですよ！ 勘弁してください！』

ギルベルトが言い終わるより前に出口に向かうが、彼はリチャードを追い抜かして両手を広げて退出を防いでくる。

『もう私は踊ったからいいだろう？』

海よりも深い紺碧かひが翳る。側近の前で不機嫌さを隠そうともしないリチャードは、腕を組んで壁に寄りかかった。

『何を言ってるんですか！ 今日には有力貴族の御令嬢方が集まっていますよ！? 最低でもあと五人と踊っていたかなくては……』

小脇に持っていた招待客リストをギルベルトが指し示す。びつしりと名前が書かれているそれは、見るだけで頭が痛くなりそうだ。

『………分かったよ。踊ってさりげなく情報を聞き出せ、あわよくば当主に接触を………と言いた  
いんだろう』

リストを一瞥いちべつしたりリチャードは溜め息を漏らした。

この場は自分にとって、様々な情報を一気に手に入れられる格好の機会だ。これからの地位を盤石にするためにも、情報を収集し、地盤を固めておくとギルベルトは言いたいのだろう。

『理解しているのなら、最初から抜けるなどと言わないでください』

これは公務で、自分のためでもあって、どうしようもない。そう思うけれどやはり退屈で、ストレスだけが溜まるこの空間は嫌いだし、抜け出したい。

『……十秒待つて。そしたら今晚は上手く立ち回るから』

リチャードは気持ちを切り替えようと大きく息を吸って吐いた。

『よし』

そうやって笑顔の下に感情を隠し、リチャードはこの六年間社交界を渡り歩いて来たのだ。

六年は永遠のようで、短い年月。

彼女の髪は胸元ぐらいたったのが腰下ぐらいままで伸び、愛らしさのみだった微笑みは優艶ゆうえんさが見え隠れするようになって。

確実に大人への階段を上りつつある彼女を、リチャードが一番近い場所ですつと見守ってきた。そしてついに今宵——恋い焦がれてきたエレーナがデビューする。